

Le Clos de la Bruyere

ル・クロ・ド・ラ・ブリュイェール

地区、村 : Soings en Sologne ソローニュ

オーナー : Julien Courtois ジュリアン・クルトワ

HP : <http://www.juliencourtois.com/>



【ワイナリーと造り手について】

ジュリアンはクルトワ家の三男として生まれ、幼いころから家業のワイン造りを手伝ってきた。父のクロード・クルトワとともにソローニュに引っ越し、1995年からレ・カイユー・デュ・パラディがワインを造り出し、その3年後の1998年、ジュリアンが20歳のときに《ル・クロ・ド・ラ・ブリュイェール》として独立した。ル・カイユー・デュ・パラディから5kmほどのところに、自宅とセラーを建て、4.5haの畑からワインを造る。



早くから独立し、独自の世界観のワインを造り出してきたジュリアンの話す様子はカミがなく、例えばワイン名からも彼の思慮深さ、大事にしているものがよく分かる。

Résonance : 共振、共鳴 (シュナン)

Autochtone : 先住の、大地からの (ロモランタン)

Originel : 起源 (ムニユ・ピノ)

Sava.Sol : サヴァニャン・ド・ソローニュ (ムニユ・ピノ)

Esquiss' : 下絵、草稿 (ムニユ・ピノ)

100% : (ガメ)

Ancestral : 先祖から受け継いできた (コー、ガスコン、自根のガメ)

Elements : 元素 (ガメ・ショードネ)

少し昔話をすると、2001年VTジュリアンの畑は、遅霜と収穫前の局地的な雹にみまわれ、収穫の8割を失った。もともと収穫量を抑えた栽培をしていた上に、その貴重なブドウの大方が失われてしまったのだ。1年間の苦労の結果がわずかな収穫となったのだから、ジュリアンの落胆ぶりは大変なものだった。当時はムニユ・ピノから、オリジナル、エスキス、フラン・ド・ピエ、アルバの4種類の畑違いのキュヴェ

Julien Courtois & Heidi Kuka

を造っていたが、この年はあまりに収穫が少なく畑別に醸造できなかつたため、全てをまぜて醸造せざるをえなかつた。天から無常なたたきつける雹の打撃を受け、たった2樽に減ってしまったワインにも、ジュリアンはユーモアをまじえて「コレール・ド・ゼース（ゼウスの怒り）」と名づけた。醸造から1年以上経った2003年2月に樽からテイシングしたときにすら濃厚なジュースといった感じで、購入を足踏みしてしまったが、その後6月にボトルから味わったときは、すばらしい凝縮感のある生きいきとした味わいで、すっかりワインとしてのまとまりができていた。

このようなワインと歩んできたからこそ、現在のラシーヌだと常々感じずにはいられないが、2015年頃からのジュリアンのワインには透明感のある果実味と内側から湧きあがるようなエネルギーを感じる。それには気温が上がり、収穫時期も乾燥する年ばかりになってきたために、ボトリティスが減ってきた、もしくは全くないために酸化的なニュアンスが減退してきたと言うこともあるだろう。荒々しさの残るままリリースされていたころを懐かしくも思いつつ、現在のジュリアンのワインには余計な装飾の無いピュアな味わいが、品種とその土地の味わいが素直に表現されている。2020年にはコレール・ド・ゼウスを彷彿とさせるような、リバション（VT05~07のブレンド）がリリースされ、荒々しかった要素がまとまったときにしか現れない美しさを湛えている。

